

私の助けはどこから来るのか 詩編121編

私たちの愛する祖国日本は、マグニテュード9.0の大地震に襲われ、その直後高さ15メートルに及ぶ津波が何千人の犠牲者を呑み込み、原子炉の部分的メルトダウンという最悪の事態に直面しています。

このような大惨事にぶつかった時、神を信じる人々の心をよぎるのは、神の沈黙ということです。神は何故何もなさないのだろうか。何故天から神の声が響き渡らないのか。神は私たちのことを心にかけてくださっているのか。私たちが苦しんでいるのをご存知なのか。そう私たちは問わざるを得ません。

聖書はこのことに関してどう言っているのでしょうか。まず第一に、聖書は、そのような疑問を投げかけることは神への冒瀆だとは言っていません。何故なら、聖書は苦難に臨んで神の沈黙に抗議する声を大切にしているからです。

一つの例を挙げます。詩編22編は、次のように苦しい心の中を神に訴えています。「わが神、わが神、何故あなたは私から遠く離れておられるのですか。私のうめきの声に耳をかたむけてくださらないのですか。」

同時に聖書は私たちに、人間のロジックや理性を満足させる答えを期待してはならないと忠告します。「ああ、そうか。成る程ね。それなら分かった。」というような簡単な答えを期待してはならないと言うのです。

確かに聖書の中で、神は決して問題のない人生、バラ色の人生、すべてがうまくいく苦労や苦難のない人生を約束されていません。

そしてもう一つ、聖書は人間が有限な存在であることを指摘して止みません。私たちは神ではないのです。私たちが人間である以上、永久に分からないことがたくさんあるのです。何故このような大惨事が起こらなければならないのか、という疑問はその一つです。私たち人間は何故という問いに答えなしで生きていかなければならないのです。

しかし聖書は、苦しみや苦難といかに戦ったらいいのかという問いには明確に答えています。勇気を持って。くじけるな。共に手を取りあえ。共に生きよ。慈しみ合え、そして祈れ。これが答えです。

このコンテキストにおいて詩編121編は大切なヒントを与えてくれます。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。あなたがいで立つのも帰るのも、主が見守ってくださる。今日も明日もとこしえに。」

私たちはこの大惨事にいかに向き当たたらいいのか。主が私たちの苦しみを共にしてくださるが故に、主が私たちの汗も涙も痛みも知り尽くしておられるが故に、勇気を持って、希望を持って。助け合え、分ち合え。共に祈れ。これが詩編の私たちへのメッセージです。

繰り返しますが、有限な私たちには、何故このようなことがという、何故は分かりません。しかしいかにこのようなことと向き合ったらいいのかという問いへの答えは与えられています。明確に与えられています。聖書は言うのです。その答えで十分。神を信じて生きる者にはそれで十分。

それではこの大惨事で命を落とされた方々はどうなのでしょう。シェルターで寂しく亡くなったお年寄りはどうなのでしょう。一瞬にしてこの地上から姿を消してしまった何千人という方々はどうなのでしょう。

有限な私たちは永遠の命についていろいろ詮索することは許されていません。しかし確かなことが一つあります。それは、神は彼らを見捨てられることはない、ということです。私たちの想像もつかない素晴らしい形で、彼らを抱き入れてくださるということです。神は生きている者にとっても、死んだ者にとっても慈しみの神であります。

神は私たちが心にかけてくださっているのでしょうか。勿論です。神は私たちが苦しんでいるのをご存知なのか。然り、然りです。神は生きている者も、死んだ者も愛し、慈しまれるのだろうか。その通り、その通りです。